

2022年7月3日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 36

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

南シナ海問題にかかわる周辺的な情報と考察を二つほど挙げておく

1

1955年に香港で次の地図帳が出版されている。

『最新中国分省地図』

香港：大中書局

1955年6月初版

この地図帳の29図は「南海各島嶼」であるが、これは1947年に中華民国が公表した「南海諸島位置圖」に類似している。しかし、大きな違いが一つある。こちらにはU字線が描かれていない。もっとも解説部分では次のように記されている。

南沙群島隣近菲律賓婆羅州馬來半島越南等地、站在南海航路的要衝。在軍事上和交通上都佔着重要地位、實爲**中國南部国防的最前哨**。（強調一嶋尾）

2

『皇清職貢録』を素材として清朝の天下観を検討する研究があるが、私はそれは適切なことではないと考える。『皇清職貢録』（乾隆26年〔1761〕序）は早稲田大学古典籍総合データベースで見ることができる。

『皇清職貢録』は清朝の版図内及び諸外国の人々の容姿・服飾の多様性を表現した著作である。各省の総督・巡撫に対して管轄している省及び隣接地帯の少数民族の服飾を報告するようにとの乾隆16年（1751）の諭が冒頭に置かれていることやテキストの大部分が版図内の少数民族の服飾・習俗の記述にあてられている（全九巻のうち八巻）こと*から、版図内の文化的多様性の具体的な記録を作成することがこの企画の主眼であったと思われる。しかし、冒頭の巻一は版図外の国々の住民の服飾の記述にあてられている。これは『職貢録』という伝統的なジャンルの書式に則ってその記録を作ろうとしたためであろう。

この著作は二つのアイデアを結合したもののように見える。異民族の服飾の一覧というアイデアは古く梁の『職貢録』に遡るものではあろう。しかし、本来の『職貢録』は、

版図の外にある国から朝貢してくる人々の服飾・風俗を記したものである。版図内の住民の文化的多様性を記録に値するものとするアイディアはおそらくマンチュリアに起こった清朝がモンゴル、トルキスタン、チベットに版図を軍事的に拡大して行く中で形成されたものである。その記録を『職貢録』のスタイルを用いて記録しようと考えたわけである。ここで既に「職貢」という概念が弛緩、あるいは無意味化していることは明かであるが、版図外の国の記述においても「職貢」の概念は緩やかに適用されている。それは『大清會典』の「朝貢」の記録と比較すれば明かである。

易行責編『大清五朝会典』（北京：綫装書局、2006年）所収の「康熙会典」（康熙29年〈1690〉）、「雍正会典」（雍正10年〈1732〉）、「乾隆会典」（乾隆29〈1764〉）、「嘉慶会典」（嘉慶23年〈1818〉）、「光緒会典」（光緒25〈1899〉）の「朝貢」の記載の変化を見てゆく。

まず「荷蘭（オランダ）」を例に考えてみたい。『皇清職貢録』巻1:61abでは「荷蘭」の「職貢」について康熙年間以降「貢市不絶」ということを記すのみである。これに対して『大清會典』の「荷蘭」の扱いは通時的に変化しており、清朝の朝貢観が決して一貫したものはなかったことを示している。「康熙会典」の巻72:12a-14a(pp.979-980)及び「雍正会典」の巻104:22a-23b(pp.1769-1770)では「荷蘭國」は朝貢国とされやや詳しい記述がある。康熙5年に八年一貢の規定がなされ、康熙25年に五年一貢に改められたとある。「雍正会典」のなかに雍正年間の動向に関する記述はない。「乾隆会典」の巻56:1ab(p484)は「荷蘭國」を朝貢国から外している。「嘉慶会典」の巻31:2b-3a(pp.345-346)は「荷蘭」を朝貢国として復活させている。しかし、その貢期の記述(4a)を見ると、「荷蘭無定期、旧例五年一貢」とある。「光緒会典」の巻39(p350)ではまた「荷蘭」は朝貢国から外されている。光緒年間に「荷蘭」が朝貢国とされていないのは当然かもしれないが、アヘン戦争以前にすでに朝貢国から外されたことがある点は注目に値する。康熙年間の「荷蘭」に対する朝貢規定が雍正年間には空文化し定期的な朝貢がなくなったために乾隆年間には朝貢国とされなかったように見える。しかし、嘉慶年間には定期的な朝貢はなかったにも関わらず、名義的には朝貢国とみなされるようになっていく。乾隆年間に「荷蘭」から外されたのは18世紀後半にオランダ東インド会社が中国貿易においてイギリスに押されて存在感を失っていたことが背景にあるのかもしれない。しかし、オランダ東インド会社解散後に再びオランダが朝貢国とされたこと背景は要検討である。もしかすると1795年のオランダからの使節派遣が関係しているのであろうか。Tonio Andrade.2021.*The Last Embassy:The Dutch Mission of 1795 and the Forgotten History of Western Encounters with China*. Princeton Univ.pr.参照(実はまだプロローグしか読んでいないが、画期的な本のようなものである)。

つぎに「西洋」について検討したい。『皇清職貢図』巻1:33abの「大西洋」の項では、その雍正年間の朝貢として、「意大里亞教化王」の雍正3年(1725)の朝貢と「博爾都噶爾亞國」の雍正5年(1727)の朝貢が挙げられている。これは「雍正会典」巻104:31b-36a(pp.1774-1776)の記述と合致している。会典によれば、雍正3年に「西洋意達里亞國教化王伯納第多」が朝貢し、雍正5年に「西洋博爾都噶爾王若望」が朝貢している。前者はローマ教皇ベネデ

イクトゥス 13 世の使者であり、後者はポルトガル国王ジョアン 5 世の使節である。いずれも当時の雍正帝のキリスト教禁圧について交渉するために送られたものである（黄啓臣、1998.「麥德樂使華與中葡關係」『行政』第 11 卷、総第 40 期）。新教の「荷蘭」に対して、カトリックの代表が「西洋」とされているようである。「乾隆会典」も「西洋」を朝貢国とするが、具体的な国名は挙げていない。「嘉慶会典」巻 31：3a(p.346)は、イタリア、ポルトガルのほかに、乾隆 58 年（1793）の「英吉利（イギリス）」の朝貢を含めている（あるいは典礼問題にこだわる国々が「西洋」ということか）。

要するに雍正期以降に『大清会典』において朝貢国と見なされたことがあるのは、オランダ、イタリア、ポルトガル、イギリスだけであり、しかもオランダは除外されることもあった。これに対して『皇清職貢録』巻 1 はより多くのヨーロッパの国々を「職貢」の国として記述している。「大西洋合勒未祭亞省（属熱爾瑪尼亞國）」「西洋翁加里亞國」「大西洋波羅泥亞國」「法蘭西國」であるが、いずれも中国王朝との関係は示されていない。

さらに『皇清職貢録』巻 1 から東南アジア方面の事例、「麻六甲（マラッカ）」（巻 1:74a-75a）と「柔然（ジョホール）」（巻 1:59a）を取り上げよう。マラッカ王国は 16 世紀初頭にポルトガルに占領され、17 世紀中葉にオランダがそれを奪っている。また、マラッカがポルトガルに征服されたのち、マラッカの王族がジョホールに王国を立てブギス人の影響を強く受けるようになっていた。『皇清職貢録』は「麻六甲（マラッカ）」については、かつて明朝に朝貢していたが、今は「荷蘭」に従属して朝貢していないということを正確に記している。「柔然（ジョホール）」については歴史的変遷や中国との関係は一切記されていない。

このように『皇清職貢録』の「職貢」とは「朝貢」概念とはほぼ関係のない範疇であると言することができる。異民族の服飾の多様性を示す作品のジャンル名として「職貢録」という呼称が使われているにすぎない。この本は「職貢」について記そうとしたものではなく異民族の文化的多様性の表象に力点を置く著作である。

また、この本は地理的な理解を示すものではない。この本を読んでも「荷蘭」がどこにあるのかはイメージできない。そこに記された「荷蘭」の容姿・服飾はアジア海域で活動するオランダ東インド会社のオランダ人の姿であろう。決して天下空間を示したものではない。この著作は、漢民族以外の諸民族の服飾を中心とする習俗の多様性を記述したものであり、天下や世界を表現したものではない。ところが、これを黄千人図系の「天下図」と並べて中国の天下観を議論する向きがあるようである。『皇清職貢録』の欠を補ったのが黄千人図系の「天下図」なのであろうか。あるいはそうなのかもしれない。しかし、両者はかなり異質なものである。『皇清職貢図』は、漢民族と異民族を明確に区別していることは勿論であるが、版図の内外も明確に区別して記述している（もちろん天下図の場合も描写の密度の差で版図の内外のおおよそは容易に認識しうるのではあるが、章を分けて記述する『職貢図』のほうが明確である）。また、例えば『大清萬年一統地理全図』（これも早稲田大学古典籍総合データベースでみることができる）のヨーロッパ方面の描写を見ると、地図の左端に「荷蘭」や「大西洋」は見つかるが、「英吉利國」や「法蘭西國」は見いだせない。また、地図の下

方に「嘛六甲」は見つかるが、「柔然」は見当たらないようである。安易に両者を結びつけて論じるべきではないように思われる。